



尿膜管がん

(にようまくんがん)



尿膜管がんについて

尿膜管がんは、膀胱にできる悪性腫瘍の1つで、非常にまれな腫瘍です。人間は胎内にいるとき、臍の緒を通じて必要な物質のやり取りを行います。赤ちゃんの膀胱から臍の緒につながる管を尿膜管といい、通常は出生後閉鎖してしまふのですが、構造は残ります。この尿膜管の部分ががん化したものを尿膜管がんと言います。膀胱にできる悪性腫瘍では膀胱がんが知られていますが、尿膜管がんは膀胱がんの1%未満の発生頻度です。

診断について

尿膜管がんは膀胱の外に向かって成長することが多いため、早期には血尿や膀胱の違和感などの自覚症状がでにくい病気です。よって症状がでるときには進行している状況で発見されることが多いです。

尿膜管がんのほとんどは腺がんですが、一部の膀胱がんでも腺がん場合があるため、診断が難しい場合があります。

治療について

切除が可能な尿膜管がんの治療

遠隔転移がなく、切除が可能と考えられる範囲にがんがとどまっている場合には、第一に外科的手術を検討します。通常は、腫瘍のある部を含む膀胱壁から臍にいたる尿膜管を一塊として切除する手術が一般的です。進行した尿膜管がんに対しては、進行膀胱がんと同様に膀胱全摘術が検討されることもあります。しかし、進行した尿膜管がんは、むしろ腹腔内に散らばることが多く、外科的手術の適応とはならない場合が少なくありません。がんの進行している範囲に応じて、手術の術式が異なります。

切除不能または転移性の尿膜管がんの治療

がんが進行して切除不能な場合やすでに他の臓器に転移がある場合には、病状の進行を抑える目的で薬物療法を行います。

